庭園 協会ニュース 第96号

一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒 169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/

編　集：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、内田 均、鈴木貴博、豊藏 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：2019（平成 31）年 3 月 15 日

大きな一の鳥居を包み込むほど成長した樹々

原点回帰の101年目

平井 孝幸

庭園協会の初代会長が本多静六博士であることは、みなさんであればよくご存知のことと思います。日比谷公園の設計や明治神宮造営などで活躍された方です。

その明治神宮の森も、造営されて約100年になります。荒地のような風景から、様々な樹木が生い茂り、四季の景色が楽しめる立派な極相林に成長し、参拝に訪れる人々を癒しています。当初の計画の中に、「枯れた倒木は林の中にそのままにしておく」という方針があり、これは今なお遵守されていると聞きます。参道の玉砂利にある落ち葉は、朝・昼・夕と一日三回掃き掃除で集められ、境内の林の中に戻すそうです。境外に持ち出さず、林の中で風景を豊かにし、土に還っていきます。

先日行われた当協会の創立百周年記念式典に参加し、帰路についた際、ボディに〝産業廃棄物処理運搬車〟のシールが貼られた造園会社のパッカー車を見かけました。本多博士が見たらどんな顔をするのかと考えずにはいられませんでした。枯れ枝や落葉も自然に還すための土地が限られる現代、産業廃棄物として処理せざるを得ない場面も確かにあるでしょう。でもその価値を、自然と一番身近な私たちですら、見失いつつあるように感じています。

私たちの協会も創立から100年の時が経過し、時代も大きな変化を遂げています。そんな時だからこそ、高い技術力と想像力・発想力だけではなく、現代の私たちが大切にしなければいけないことは何なのかを考える良い機会ではないでしょうか。向上を目指すと同時に、原点回帰の101年目にしたいと考えています。（理事）

国際活動委員会報告

シカゴの日本庭園修復に関して

三橋 一夫

日本庭園協会は昨年10月、創立百周年の式典を終えた。今まで過ごしてきた歴史を振り返りながら、国際活動も、これからの時代に対応した道を更に求め、発展させていく必要がある。

現在に至る当協会の国際活動は、1996年のポートランドでの最初の国際日本庭園シンポジウムを開催して以来、2012年のシドニーまで7回のシンポジウムを行った。2000年代にはカナダ、アメリカでの技術指導に鈴木直衛、小野登身、水本隆信各氏らと共に2年間、ワシントンの日本大使館での剪定作業指導に各支部若手を3年間で9名を派遣した。現在は北米日本庭園協会（NAJGA）のメンバーとなり、デンバー、シカゴ、フロリダ、ポートランドでの大会に参加し、講演を行なってきており、更にポートランド日本庭園のセミナー指導の任も務めてきている。

なぜこれほど外国では日本庭園が愛されているのか、庭園を媒体として日本文化が紹介され、そこに内在する趣き深い味わいのためであろう。今まで現地の日本庭園を守る苦労をされた人達のお陰と感謝することを忘れてはならない。ともあれ今、外国には500ヶ所近い日本庭園があり、その内アメリカには250ヶ所以上とも言われている。

歴史ある場所を市民の憩いの場に（面積２エーカー）

いずれの庭園も管理する技術者不足を訴えており、微力ながら当協会も要請に応えて技術指導を色々な形で行なってきた。多くの日本庭園は修復や技術指導を急ぎ必要としているのが実情である。そこで国土交通省は2017年から「海外日本庭園修復モデル事業」として日本の技術支援を必要とする海外の日本庭園の修復を実施してきている。海外にある日本庭園は日本の魅力を発信する場として活用され、来日するきっかけの場となり、日本を理解してくれることに貢献している。しかし、現地技術者の庭園の整備、管理技術が未熟なことにより適切に維持管理されていないところもあり、在外公館などには日本庭園の修復、管理に関する多くの相談や要望が寄せられてきており、大きな課題となっていた。

現在ではアメリカには北米日本庭園協会（NAJGA）、イギリスにも英国日本庭園協会ができ、各国の日本庭園間でのネットワーク、情報交換が活発となってきている。すでに2018年には日本造園組合連合会がアメリカ・カリフォルニアで、日本造園建設業協会がルーマニア・ブカレストで国土交通省の依頼を受け庭園の修復を実施している。

昨年度、当協会にもシカゴのジャクソンパーク内のフェニックスガーデン修復の依頼が来たので7月に下見調査に行った。シカゴ市公園局、国土交通省の脇坂隆一国際緑地環境対策官、現地日本領事館、地元有力支援者ロバート・カール氏、ポートランドの内山貞文氏（以前2002年に庭園の全体設計をし、一部修復を手掛けた）らと何をどうしたいのか、庭園を将来どう発展させていくか、現地の希望を聞き、意見を出し合った。その提案をまとめた設計とパースを帰国してまとめることになった。この庭は1893（明治26）年シカゴ万博の時に日本政府に

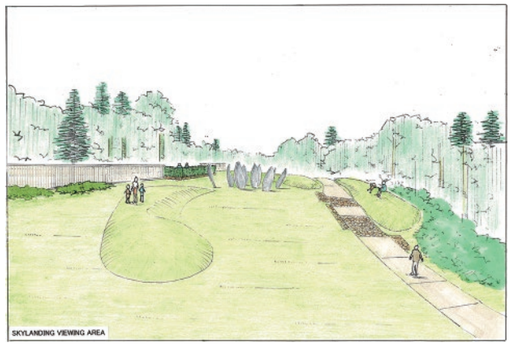
庭園内の四阿にて打合せをする

より宇治平等院の鳳凰堂を模した建築と共に造営、出展されたもので、130年になんなんとする歴史を持つ。建物も含めシカゴ市民は戦時中でも大切にこの庭を管理してきたが、残念ながら建物は1946年に焼失してしまった。その跡地には現在、オノヨーコ氏の作品「スカイランディング」が恒久展示されている。平和への願いを込めてつくったオブジェでハスの花びらをモチーフにした高さ約3.6メートルの金属製のもので12枚が芝生の上に生えているような形で設置されている。

この庭園はミシガン湖の水位が上がったことにより護岸の石が沈んだり、全体の荒廃、拡張の必要が考慮される状況となっている。拡張分も含めた全体設計は幸い好評価を頂き、本年度よりいよいよ5ヶ年計画での修復工事を始める予定でいる。作業に参加頂く会員を各支部に募ったところ、20名程の方々に応えて頂いたので、国際活動委員のメンバーも含め順次5名のチームを編成して現地に向かう予定でいる。国からの予算は決して十分とは言えない額なので協力頂く皆さんにはご苦労をかけることになるだろうが、海外での作庭経験は、これからの庭づくり人生に必ず役に立つと思うし、このチャンスを活かしてこれからの海外での活躍の場を広げていって欲しいものと願っている。

いずれにしても第一陣としてのチームの役割は色々な条件をクリアしながら技術を教えるばかりでなく、我々の庭への思いや心、常日頃の信念をも、庭という形を通して現地のプロの人達にも、支援してくれる市民の方々にも伝わるよう仕事を遂行していく責任は大きいものと思う。シカゴ市と当協会との間に良い交流関係が生まれることをひたすら願いながら、気を引き締めて取り組んでいきたいと考えている。

（理事　国際活動委員長）



オノヨーコ氏作のオブジェを中心に修景する

第6回　全国支部長協議会報告

村田 義雄

2019（平成31）年
1月26～27日

今年で6回目を迎えた全国支部長協議会が2019年1月26～27日の2日間、千葉県支部主催で成田空港近くの「ホテルマイステイズプレミア成田」にて開催されました。当日は年明けから乾燥続きの日が続いていた中、千葉県では珍しく雪模様の日の会議となりました。

高橋康夫会長、菊地正樹、藤枝修子両副会長はじめ本部より9名、支部長14名（兼務含む）、千葉県支部会員3名が参加して協議が行われました。千葉県支部からの発議である「支部活動の在り方について」では、各支部の現状と活動内容の報告と提案をして頂き、各支部の体制に合わせた積極的な活動にしていくことを確認しました。また、本部からの要請で「支部広報部を開設」し、本部と支部、支部同士の相互協力体制を緊密化させ多様なSNSの活用検討や本部ホームページ内に支部のバナーをつくってはどうかなど情報交換の重要性を千葉県支部発議として協議しました。今後、本部総務委員会を中心に検討会を開き、形にしていくことを確認するなど、予定時間を延長して熱の入った協議会となりました。協議会開催後、恒例となっている懇親会は、成田市内にある日本料理店『翁本家』にて開かれ、定期総会以外ではなかなか会えないこともあり、会話が盛り上がり、千葉県支部会員も参加させて頂き、情報交換交流会として楽しく語り合うことができました。

2日目は、千葉県を代表する観光地の「成田山新勝寺」にお参りをしました。その後、自然豊かで広大な「成田山公園」を散策見学し、平和の大塔や公園の奥にある「雄飛の滝」と「文殊、竜樹、竜智」と呼ばれる3つの池、書道美術館脇にある水琴窟の音色を楽しむなど，盛りだくさんで有意義な2日間の全国支部長協議会を終えました。

（評議員　千葉県支部長）

村田義雄支部長の進行のもと
討議を重ねた

編集委員コラム

木になる葉なし 12

豊藏　均

平成から新しい元号へと変わるカウントダウンが始まり、新しい時代の幕が開こうとしています。

このように時代が大きく変わろうとするタイミングで、お伝えしなければならないことがあります。それは今、飛石が絶滅危惧種のような状況に陥っていることです。

かつて飛石といえば、私が「作庭の三種の神器」といったほど、庭づくりに欠かせないアイテムでした。垣根を背景に石燈籠を建て、蹲踞を組み上げ、家と蹲踞を飛石で結べば、一応一つの景色になったほどです。

この限られた石燈籠・蹲踞・飛石といった「作庭の三種の神器」を用いながらオリジナリティーを出そうと努めていた作庭者が、かつてどれほど多かったことか知れません。

また、ちょっと前までは、「庭づくりは、飛石に始まり、飛石に終わる」とまでいわれていました。それはどういう意味かといえば、飛石の打ち方ひとつで作庭の巧拙はもちろん、作庭者の力量や美的感覚から、人格のすべてまでが浮き彫りのように表われるからです。

したがってどんな巧言令色を並べ立てても飛石の打ち方ひとつ見て、「この人はできる！」と、技と心の高低浅深が判別できました。だから口先だけの講釈師かどうかは、飛石を見れば本物か偽物かの違いは、直観的に一目瞭然、見破れました。

それほど日本の庭を象徴し、欠かせなかったのが飛石であり、その打ち方の優劣を見極められた目利きのクライアントも多かったようです。

この飛石を私たちの料理に譬えれば、日々の食事に欠かせない醤油や味噌であり、昆布と鰹節から採った出汁（だし）のように日本人の暮らしになくてはならないものでした。

それほど欠かせない飛石が絶滅危惧種だと知ったのは、私ごとで恐縮ですが、拙著『桂離宮に学ぶ 敷石と飛石の極意』（講談社刊）で、北海道から沖縄までの作庭者31人によるアンケート調査をしたからです。

熟練熟年世代の一部の作庭者は例外でしたが、その他八割方のみなさんが口をそろえて「バリアフリーの時代であり、施主から飛石は危険視され撤去、不要」と書き並べていたことです。それに追い打ちを立てるような言葉も聞きました。

それが「庭しまい」です。

少子高齢化時代の今、高齢者はどんどん増え続け、世代交代も進んでいます。さらに価値観の多様化に伴って、従来の庭は不要～維持管理が面倒・困難～取り壊し。このような図式を象徴するような言葉が「庭しまい」ではないでしょうか。

「飛石は不要どころか、庭自体が社会から不要とされ、これからの時代に弾き飛ばされる」のではないかと思われるみなさんも多いでしょう。

確かにそれも事実ですが、問題は作庭界が何も疑うこともなく「伝統庭園の継承」だ、やれ「文化財庭園の維持管理」だと謳ってきた反面、現代庭園への啓蒙運動が欠落していたことに気づかなかったことです。

私は何も「伝統庭園」とか「文化財庭園」を否定する気は毛頭ありません。ただ、「伝統」と「伝承」の違いを考察・検証しながら、未来を生きる若き作庭者たちと一緒になって新時代にふさわしい「今の庭」を模索すべきだといいたいのです。

今がどんな時代なのか、庭へのニーズと価値観は何かを真摯に探るべき時機なのです。

足裏から伝わるあの独特な感触、歩く早さと方向をコントロールする飛石は景色にもなります。そして、手つかずの大地にひと一人が歩ける最小限の道が飛石だとすれば、これほど自然界を大切にした思想と哲理を象徴したものはないでしょう。

飛ぶ石・飛び去る石・飛び散る石・飛び込む石・坂を登る石・木々の間を潜る石・沢や池を渡る石などなど、かつての飛石は多種多様で多彩でした。その飛石を今の時代に引き継ぎ、さらに進化させ未来へ繋げることが、真の「伝統」ではないでしょうか。

明かりに照らし出された飛び石とヒメシャラの落花＝千葉市内のＴ邸にて＝